

5年ぶりの墓参り

札幌市医師会
山口整形外科クリニック

山口 秀夫

皆様は年に何回お墓参りに行かれるでしょうか。お盆、お彼岸、命日など、多い人なら、年に数回は行かれることでしょう。それなのに、私は、この5年間に1回も行っていません。このままでは天罰が下ると思い、春から、お墓参りに行く計画を立てました。

私の家の墓は信州松代町という、真田幸村で有名になった所にあります。札幌からはちょうど日本を半分縦走する距離です。日帰りではとても無理なので、1泊2日とし、7月15日～16日の連休に行くことに決めました。

7月15日7時、札幌の自宅を出発、飛行機、北陸新幹線、レンタカーと乗り継ぎ、14時に私の家のお墓に到着しました。当日は長野県に高温注意報が出されており、また、一番暑い時間に着いたため、気温40度と目もくらむような暑さでした。そんな中、墓の掃除、草取りをし、線香と花を供え、両親や先祖のめい福を祈りました。ちょうどその時、東京に住んでいる弟が家族を連れて墓参りに来てくれて、久しぶりに会うことができました（写真、中央が筆者）。弟は毎年来ていると言っていました。先祖を敬う気持ちは大分私とは違うようです。その後墓を後にして、親戚を回り、日頃の無沙汰を詫び、東京に一泊して翌日、札幌に帰って来ました。帰りは羽田の滑走路が一本、暑さで穴が開き、飛行機が4時間遅れるというおまけがつき、自宅に着いたのは22時頃でした。

今回の墓参りで考えたのは、自分はどんな墓に入るのが良いだろうかということです。両親のように、先祖の墓に入るもよし、散骨、樹木葬、お骨プレートなど、いろいろ現代的な方法もあるようです。今年のお盆休みはそんなことを思い、ちょっと深刻になりました。



田舎の人・都会の人・日本人と外国人

遠軽医師会
プライムいくたはら

小森山憲次

数年前、新聞紙上にカタクリの群生地の記事が掲載されていたので行ってみた。

電車・バスに乗って現地に着いたのは良いが、どの辺りか尋ねてみた。おじさん曰く「俺はこの辺の者でないのだから知らない」と。

泥だらけの長靴を履いて土地の者でないとは笑わせる。中年女性に聞いて20～30分歩くと、小山のふもとには赤紫色のカタクリが風にそよいでいた。言わずと知れたユリ科の耐寒性球根多年草で、その昔鱗茎は片栗粉の原料に利用されていたとか。

札幌でのこと。地下鉄を下車し地上に出ようと階段を上っていたら、左足の靴が脱げてしまった。私の後を歩いていた若い女性が拾って持ってきてくれた。私はお礼を言い、お茶でも誘おうかと思ったが、大きな声を出されてもやなので止めた。こういう時の女性は決まって不思議と素敵に見える。私は「アブナイ」か「タリナイ」おじさんと見えるのか、若い女性には特に嫌われる。

何度目かの香港に行った際、妻と夕食を楽しみ、船上花火大会なるイベント見物に行った時、夜店を見てくると言って互いに逸れてしまった。私は帰り道とホテルを尋ねたら、若い女性は親切にも壁の案内パネルまで連れていき、教えてくれた。お礼を言ったら少し照れた顔がまた魅力的だった。よく田舎の人は親切で、都会の人は不親切だと言われるが…人にもよるが必ずしもそうではないと思う。札幌の人も香港の人もとても親切だった。

シドニーから帰国の際、無事に着陸スポットに止まった。頭上の荷物を取り出す時だ。私は自分の荷物を取り出す時、私の後ろの席にいた米国人らしき人物の荷物も出してあげようと荷物に触れたら、「なんでお前は俺の荷物に触れるんだ」と怒り出した。これには驚いた。日本人ならば普通「すみません」とか「ありがとう」という場面で怒り出すのだ。私も自分の荷物だけ取り出せば良かったのだ。同じ体制下でもこうも違うものなのか。連れが日本人女性なので、後で話を聞いたであろうが。自分は自分、人は人ということか。

どんな時にでも自分に素直でありたいと思う。